演題番号23

脳出血後遺症により着衣障害を呈した症例に対する介入の一考察
- 身体表象に着目して -

○大塚 開成[1)] 中山 彰子[1)] 本田 隆[1)] 佐久間 克彦[1)] 築城 裕正[1)] 増田 武信[1)] 本田 喬[1)]

1) くまもと成城病院

【はじめに】

前開きシャツの着衣（以下, 着衣）が困難であった症例に，Siriguの身体表象における４つのサブシステム（視空間性表象，意味性表象，オンラインの身体表象，運動表象）を考慮し介入した．良好な結果を得たため報告する．

【症例紹介】

60代男性．病前より右視野，左聴覚に障害あり．右側頭葉皮質下出血（頭頂葉への広範な出血）による開頭血腫除去術後，当院へ入院した．発症後57日目より身体表象に着目し，着衣への介入を開始した．開始時，MMSE24点，BRS左上肢・手指VI，左同名半盲を認め，BIは80点．身体表象は，①自画像や身体部位の写真の組み合わせ（視空間性表象），②身体部位の呼称（意味性表象），③模倣動作（オンラインの身体表象・運動表象）を用いて評価した．①について，自画像は左右反転していたが，身体部位の写真の組み合わせは可能だった．②について，身体部位の呼称は可能であったが，左右の誤りがあった．③について，模倣動作は左右反転していたが，視覚での分析は他の感覚を用いた時よりも良好だった． 着衣をする際，衣類の形状の認識は可能であったが，袖の位置が左右逆になり介助を要していた．本人より，頭が混乱するとの記述を認めた．

【倫理的配慮】

本人に口頭及び書面で十分に説明し同意を得た．尚，当院倫理審査委員会からの承認も得ている．

【病態解釈】

全ての表象において，自己を中心とした左右の関係性が変質していると推察された．そのため，衣類に対応する身体部位の選択ができず着衣に困難さを生じていると考えた．

【治療仮説及び介入戦略】

身体表象における，自己を中心とした左右の関係性を改変する必要があると考えた．よって，本症例が処理しやすい視覚情報を利用し，視空間性表象と意味性表象，視空間性表象・意味性表象とオンラインの身体表象・運動表象の繋がりを段階的に用いた課題構成とした．課題は人形や衣類を用いた視覚情報の照合課題や視覚情報から体性感覚情報への変換課題を実施した．訓練は全10回，１回あたり40分間とした．

【結果】

自画像は左右反転しなくなり，身体部位の呼称や模倣動作も改善した．また，着衣は左右の誤りがなくなり自立し，頭の中で体を回転できるようになったと記述も変化した．

【考察】

本症例の処理しやすい視覚情報を用いて，多感覚情報の統合を実施できたことが，身体表象の改変に繋がり着衣に改善を認めたと考えた．